

「有無の邪見」

おおの しょういん
大野 章允

さいほうじょうど
西方浄土が極楽浄土と言われています。「これより西方に、じゅうまんおく ぶつど
十萬億の仏土を過ぎて、世界あり、名づけて極楽と曰う。」と『あみだきょう
阿彌陀經』に書いてありますが、本当にそんな所があるのでしょうか。ある人は「そんな所は実在しない。かくう
架空の理想郷だ」と言いますが、「有るとか無いとか議論するのは有無の邪見だ」とも言います。

先日、兄弟6人が集まり、夫婦共々久しぶりの懇親会を開きました。そこで出た話が亡き両親の思い出話です。

父親は「人は死んだら灰になり、お骨が残るだけで何も持っていけない」と。また「結婚をしたり家を離れる時は、『馬には乗ってみよ、人には添うてみよ』が大事だ」と言って送り出してくれたということです。なるほど人は火葬にすればお骨だけが残るだけです。そこで一番上の兄は、「仏教ではそんなことは一言も教えていない。人は死んだら極楽浄土へ往くんだ。灰になるなんてことはお経には一つも書いていない。」と言い切りました。会の終わり頃、妹は自身の若い頃の話を持ち出し、嫁ぎ先とうまくいかなく幼子を連れて実家へ帰ってきたことがあったが、一晩泊まって朝になったら母親が「タクシーを呼んで今からすぐ帰れ」と言って嫁ぎ先へ帰されたことがあったことを聞き、みんなそんなことを初めて聞いてびっくりしました。

こうして父親の人の生き方や姿を、また母親の厳しさの中に慈悲の深さを思い知ることができました。

浄土とは、有るとか無いとか議論する問題ではなく、邪見を離れよと、つまり浄土は阿彌陀仏のくどくしょうごん
功德莊嚴の場であると、お経を通して理解することが大事だと思えます。